

2012年9月17日
0:21

うたたねの電流

あさの

シャンプーを手に取つたからシャンプーをしているように生きている日々

溶けきらない砂糖のようにコーヒーの波面に揺れる夜のさみしさ

走り去る都会の空気にあこがれがひとつふたつと溶けゆく夜更け

眼の端に幼い夢が映り込みゆつくり薄れていくような午後

平和という足取り軽く春先の横断歩道は鳩の行列

拗ねている唇すらもいとおしく五月は春の病に罹る

治らない口内炎を舐めながらひとりで歩く木漏れ日の街

まだ君が知らない景色を探しつつ歩けば春は夕日に染まる

蹴り上げたかんから まわる まわる あの夏に残した想いは切つて

五線譜の線と線とが狭まって苦しい音楽室の夕闇

あめんぼが知らないうちに消えてゆく午後は思考が宙に漂う

八月の空に心を置いてきた抜け殻だけが秋にさまよう

ばらでなくみずくさに似たきみだからいつしょにいようと決めた秋の日

知らぬ間に増えた切り傷見つめてるひとりぼっちの夕日のなみだ

びりじあん2 g入りの色水を作ればあの日の夢あざやかに

しあわせつていつてもらえるしあわせをにぎり返せばてのひらの熱

かつぱえびせんはえびせん然としているから河童は反カルビー派

レシートを貰つたとたん目の前に不要レシート入れがあること

あごひげを抜くほおひげを抜くひげを抜く指先はかすかに震え

硝子戸の先の闇から浮かび出る自分の顔の冷たい翳り

てのひらで支えきれないさみしさはお風呂の泡に溶かしておこう

ポタージュにそつと沈んでゆく。パセリ ひとりの夜が重なり合つて

おきぬけの街はわずかにぼやけつつ今日という日が動き始める

大嫌いな人に似ている顔だけが浮かんで消える都会の昼間

人間の油断は街に置き去りに土曜の空が傾いてゆく

さみしさをひとり静かに積み上げる風の時間は歌が聞こえて

欲しかったものを自分が望むだけ手にした後の震える小指

そのときはそのときだからそのときの世界にじっと目を凝らしたい

地を蹴つてゆけ全身で高く飛べ僕の力は僕が信じる

うたたねの終わりをかける電流の速度で今はさつきにかわる